
紅い河

塩結G音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い河

【Zコード】

N7424N

【作者名】

塩結G音

【あらすじ】

あの妖怪の昔話。

第三弾、『九千坊』

「俺は元は天界に住んでいた。

といつてもしがない下男として力仕事に従事していたんだが。ある事で遠方まで出かける事になつた。まあ、出張つてどこかな。それでそのまま何百年と居座つちました。居心地が良かつたんだな。

その頃にこの身体を手に入れた。河童のな。

そしてあるとき、元の場所、この国に戻る事が決まつた。河童を引き連れて。

向こうでは河童が多くなりすぎ移住地を搜していいたんだ。俺はこの国が自慢したかった。

無事、多くの河童を連れてくる事ができた。河童達に水多いこの国は適していたんだ。

すぐに地方に散らばって、それぞれの文化を持ち始めたな。

俺は、最初についた地、九州に里を構え、過ごしていいたのだが。最後まで俺に従つてくれた奴らもいたから、いい身分ではあつた、と思う。

だが、あるとき、俺は過ちを犯した……

「大将、大将。

そろそろ、時刻です」

「ん、おうつ。ちょっと、どいてくれ」

ここは大川の水底。河童達の里、住居区。

そこの一一番大きな屋敷、一番大きな部屋で、大将と呼ばれた一番大きな河童は億劫に起き上がつた。

まとわり付いてるのは従者の女河童たち。

「いいじやありませんか。もう少し楽しみましょう」

「そうもいかん。どいてくれ」

しなだれつく女性達をかわし、大将は一人、水面へと泳ぎ始めた。時刻を告げに来た男河童はため息をついた。

「まったく、最近は天狗も人世も荒れているというのに。

大将は

「いいじゃですか。妖怪が逢魔が時に人を脅かしにいくぐらい新入りの女が笑い返す。

皆の目が一気にそちらを睨む。

「違うわよ。あの方は、」

「人に会いに行つてゐる」のよ

「今宵も出たな、妖怪めつ！」

そう叫ぶと同時に真剣が振り下ろされる。

大将と呼ばれる大河童は軽く避ける。

相手は本気ではあるが殺氣はない。続けて刃が振られる。

闇迫る逢魔が時、河原で大将は若い侍の稽古相手をしていた。

元服終わらぬ若侍は長い髪を振りながら挑む。

その連撃を笑顔で避ける体格差4倍は軽くありそうな大河童。

出逢いは付近の橋下で修行していた若侍に大河童が話しかけたこ

と。大振りの若侍に河童が指摘したのだ。

もちろんそのときは殺氣のこもった刀を振られたが大河童は一切

反撃をしなかつた。

それから若侍はこの時刻に修行する事にし、大河童は相手をする事になった。

「これまで、だな」

若侍は座り込み、肩で息をする。

見下ろす大将は余裕である。

「明日こそは、一本とつてやる」

「ああ、やつてみろ」

若侍は薄く笑うと鞘を杖に家路へとついた。

「大将」

河に振り向くと一体の河童が顔を覗かしていた。

若く血氣盛んな奴らの一人だった。

「そんなに興味があつたら尻子玉取るなり、水中に引きずり込むなり、」

「そればかりが人と河童の関係だと思つな」

大河童はゆっくりと水中へと歩みだした。

「こういう関係も、あるのだ」

大河童は水中に潜つた。

「あれに、手を出すなよ」

「なにごとだ。こんな夜半に」

数日後、彼らのグループに呼ばれ、大将は陸にある、ボロ小屋に来た。

時刻は子の刻、まさに深夜。

大将は生徒に手を引かれる教師みたいな心境で付いていく。

「いいから、いいから、」

中に入ると更に暗かつた。

眼が慣れるまで少し時間がかかった。

慣れてからも理解するまでが時間がかかった。

いたのは先の河童とその一味。人数は三体。

彼らはへたりこんでいた。

そして、うつぶせに倒れる、若侍。髪が解かれている。

ただ、下半身は、裸。細い尻と足が見える。

身動きひとつしない。

「お、おい。お前ら、どうしたんだよっ！！」

大将の手を引いてきた河童が慌てた。

「と、取つたんだろ？」

わざと明るく呼びかけるが返事は暗いものであつた。

「と、取つちまつた……」

一人の手のひらには直径1~2㌢の乳白色に輝く玉、河童には見慣れた尻子玉。

「こいつ、女だった……」

大将も、呼び出しに来た河童も眼を見開いた。

先にいた三匹は土下座した。

「……申し訳ありませんでした！……」「

女から尻子玉を取る、それは決してやってはいけないことであった。

尻子玉とは生殖細胞のこと。

男から取つても、それはそれまでの貯蔵がなくなるだけ、また作られる。

しかし女の生殖細胞は、生まれた時に決まっており、作られることはない。

つまり一生子をなせない、不生女の決定を意味する。

「な、なんでおまえら、わからなかつたんだよーー！」

呼びに走つた河童の声は裏返つていた。

「ここ、ここ。暗くつて。

それにこいつ、かなりの抵抗したせいで、取るのばっかりあせつたら「ぐしゃつ、

答えている途中、嫌な音で言葉は切れた。

土下座しているその頭に大将が足を下ろしたのだ。

頭だけ踏んだのに、身体全体がひき肉のよつに地面にへばりつく。

続けて隣の奴にも足を下ろす。ぐしゃつ、

残る河童は慌てて顔を上げ、そのまま腰で逃げ出した。

見上げた大将の表情は、何もなかつた。

部下達にからかわれ困つたり、優しく指導したり、他妖怪に勇ましく挑む、大将の表情は消えうせていた。

「やめつ」バンッ

小屋の端までしか逃げられなかつた一体は、腹を踏み抜かれた。

そして壁ごと、木つ端微塵となつた。

大将は残る、呼びに来た河童に振り向いた。無表情のまま歩く。

「や、やめてくださいよ。

俺は、こいつを、この人間を捕まえた時点で呼びに行つたんで、

知らなかつたんですよ！

やだ、死にたくない！！！」

入つた扉から逃げようとする河童。

しかし背を向けた瞬間、壁に押し付けられた。

大将の伸びた左腕が彼の腰に当つている。

「やだ」パンつ

河童の身体は爆ぜた。

これらの遺体を見てもどれも河童だとは思えないだろう。
全ての身体が爆ぜ、血みどろの肉塊にしか見えない。

「ううっ」

小さなうめき声に大将はゆっくりと振り向いた。

その異臭のためか、部屋の真ん中、若侍、いや乙女が上半身を起
こした。

その動きはとてもゆっくりだつた。まるで自分自身に起きたこと
を思い出すかのように。

大将は待つた。

乱れた髪のまま、立ち上がつた乙女は目を大将に向ける。
そして、大将と目が会つと、

「あはっ、あはははははっ」

乙女は大きく笑い始めた。

大将の無表情も恐ろしいが、女性のその目こそ狂氣といふ言葉が
相応しかつた。

ゆつくりと彼女はしゃがむと河童相手に振るつたであつて、愛刀
を取り上げた。鞘はない。

「あはははははっ」

笑いながら彼女は大将の壊した場所から小屋を出ようとした。下

半身あらわのまま。

大将は無表情のまま、背を向けた彼女を止めようと近寄った。

次の瞬間、何が起きたか、大将には分からなかつた。

ナゼ、自分ノ心臓ニ刀ガ刺サツテイルノダロウ。

動きが見えなかつた。刀の出元を見る。

それは彼女の背中。刀が腰から伸び、赤い円が広がつていく。下から突き上げる形で彼女は自分のわき腹ごと、大将の心臓を刺したのだ。

そしてわき腹から刀を抜いた。いや、横に動き、自ら切り開いた。これで大将だけが刃に射抜かれた事になる。その間も、

「あ はははは くふつ はつ」

彼女は笑つていた。

下半身はあらわ、わき腹からは大量の血が出るが気にせず、彼女は小屋から出て行つた。

乾いた笑い声だけが響く。

大将は彼女の残した刃に手をかけた。

引き抜くしかない。

しかし心臓を一突きされた刀。一気に抜けばさすがに大妖といえど、動けなくなつてしまつ。

その抜くスピードとその後の速度を考えながら、ゆっくりと刀を引く。

と、突然沈黙が襲つてきた。

深夜を満たしていたはずの狂氣の笑いが途切れたのだ。

「んつ」

慌てて大将は腕に入れ、完全に刀を抜いた。

栓をしていた刀が抜かれ、一気に血が出て、少しくらんできたが、倒れるわけにはいかない。

小屋の壁を壊し、最短距離で声の終わった方を見る。

そこには橋があるだけで、何もない。彼女の血の道も途絶えてい

る。

いや、その下、赤く広がる水面が見える。

大将は駆けた。胸から血が飛び散る、表情が戻らない。

そんなことは気にしていられなかつた。

ただ、手を伸ばしたかつた。その下にあるであらう、身体を捕まえたかつた。

しかし、持ち上げれたのは、遺体。

袖一杯に石を入れ、青くなつた顔は彼の知る若侍のものではない。

彼はその遺体を両手で抱え、表情が復活した。

それは、慟哭であつた。

「大将っ！！人間たちは川全体に呪をかけられました！陸に、いえ海にも移動できません！！」

「大将っ！！人間たちは川上から毒を流してきたぞ！子供達が危険だ！！」

「大将っ！！焼き石を投げ込まれました！負傷者が続出です！！」

「彼女を待つ城主の怒りは、かなりのものであつた。

彼女は切腹の上、入水自殺。犯人達の身柄はない。

謝りに来たのはどこぞの河童、自失している大将ではない。

次の日から里に住む河童達は水面にも顔を出せない状態。

そして、彼は腑抜けという言葉すらもつたひないほど、憔悴しきつっていた。

ここがあたりで彼の里も意見が割れてきた。

人間に戦争を挑む、大将を筆頭に今一度謝りに行く、どちらか決断が迫られていた。

さらに新しい情報が入つてくる。

「人間どもは九州中の猿を集めているそうです！！」

里に戦慄が走る。

猿は河童の天敵である。そんな生き物に耐えるのはこの里でも少ない。

それを聞いて、久しぶりに大将が立ち上がった。

皆が眼の色を変えた。

「大将様、出陣ですか？！」

「いえ、相談ですよね？和解の道は必ず、」

「出てくる。一人でいい」

大将は一人で陸に出、一人で人間の将と話し、一人で解散を決めた。

それは確かに成功し、河童全ての身の安全は保障される。
しかし、彼の権力は地に落ちた。

「戦わずして人間の門をくぐつた」 「そもそも、あの人間はなんなのだ」

「我らは信頼できないのか」 「この里が崩壊するなんて」 「河童が尻子玉を取つて何が悪い」

里のものは新しい里、新しい長を決めて、河童を統べるのも別に任せせる事になった。

これが俺の大罪だ。

だが、今でも俺を信頼し頼つてきたり力になつてくれる妖怪、河童もいる。果報者だ。

ん、自分を責めすぎだつて？

いや、違うな。

確かに彼女を守れなかつたことや若者達を殺した自分、そして事件を止められなかつたことも責めてるさ。

だがな、それよりも俺の心が責めるのは、

里より、彼女の尻子玉を選んでしまつた自分なんだよ。

とても綺麗で、誰にも渡せれない。譲れないものになつたんだ

そういうて、大きな手に乗る、乳白色に輝くほんの小さな玉を見させてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7424n/>

紅い河

2010年10月8日14時19分発行